カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

祈祷の使徒　祈りの意向

・教皇
息子や娘の死を悼むすべての親が、地域社会に支えられ、聖霊の慰めによって心の安らぎを受けることができるように

・日本
日本と韓国の司教が、互いの交流を通して信頼を深め、隣国の教会共同体として支え合っていくことができるように

聖トマス西と十五殉教者祭

「殉教に至る道はいきなりではない」

9月29日（日）中町教会で聖トマス西と十五殉教者祭が行われ、約240人の信者が共に祈った。長崎教区主催、長崎南地区評議会担当。

14時、16聖人を顕彰する記念庭園前で中村倫明大司教が献花をし、祈りをささげた。その後、聖堂内に移動し、聖トマス西と十五殉教者の玄義によるロザリオの祈りを皆で唱えた。

15時からは中村大司教の主司式、16人の司祭の共同司式によりミサが行われた。説教師を務めたダニエル金桐旭（キム・トンウク）師（香焼教会主任）は身近な話題をあげて分かりやすく語った。

ダニエル師は、現在メジャーリーグで活躍し、驚くべき記録を残している日本人野球選手について「彼は小さい頃から練習が終わると、周辺にあるごみを全部拾う習慣を身につけてきたといいます。有名な話なので皆さんもご存知だと思います」と触れ、大きな尊敬を受けるような選手になったのは、練習に励むと同時に、小さなことにも忠実を尽くして自分の信念を保っていたからではないかと語った。そして、次のように説いた。

「私たちは殉教について語る時、殉教は昔の人々の英雄的な信仰の証しだと思い、そのように答えます。ところが、殉教は結果的に英雄的な信仰の証しになるわけで、殉教に至る道はいきなりそうなるわけではありません。あるシスターが私に、『小さい頃、おばあさんと一緒にロザリオの祈りをしていた時、蚊にさされてかいていたら、おばあさんからひどく怒られた』と聞かせてくれました。蚊にさされても、祈るときは殉教者たちに倣って苦しみに耐え、動いてはいけないということでした。

ごみを拾うこと、蚊にさされたかゆみをがまんすることは一見、野球や殉教とは関係がないように見えます。ですが、そこから意味を見いだし、よい選手になるため、殉教者のようになるために、信じてそれを行うならば、実際にその通りになっていくということです。日常の私たちの生き方、習慣、思い、言葉、行い、一つ一つにそのような意味があるのです。そしてその中に、イエス・キリストをあらわすためにという意味を付けて、小さなことであっても忠実を尽くして行うならば、私たちの姿は栄光を受ける聖トマス西と十五殉教者のように変わっていくと信じます。天の国は小さいからし種のようなものだからです」

ミサの終わりに中村大司教は、参加者、奉仕者、子どもたちとすべての人々に向けて感謝の言葉を述べ、互いに声をかけ合うようにと願った。また、神学生たちを紹介し、召命のためにこれからも祈り、声をかけ支えてほしいと呼びかけた。今春から始まった、中町教会と同じ敷地にある長崎コレジオについても、「開校の記念の日を、16聖人の（記念）日としたい」と話した。

フランシスコ教皇様 来崎5周年を迎えて

カリスを各小教区に巡回

2019年11月24日、長崎県営野球場で歓迎に応える教皇フランシスコ©カトリック中央協議会

本年11月24日、フランシスコ教皇様が来崎なさって5年になります。あの日の感動とあの時いただいた教皇様のメッセージをあらためて思い起こしていきましょう。

教皇様来崎5周年にあたり、教皇様がローマからお持ちくださり、これでミサをささげてほしいと長崎教区に贈呈していかれたカリスを主日ごとに各小教区にお回しいたします。

ご自分の小教区にカリスが届いておささげください。

各小教区は、カリスを多くの皆さまが近くでも眺めることができるようにご配慮ください。

今年の11月24日は、長崎南地区合同堅信式となっています。この機会に合わせ、前日23日に堅信式の会場となる中町教会にカリスを届け、ここからスタートし、1年以上をかけて、長崎南、佐世保、平戸、上五島、下五島、長崎中、長崎北の順で各地区の小教区を巡回する予定です。

（中村 倫明）

タルチシオ 菊地功大司教 枢機卿に

10月6日発表、12月8日親任

©カトリック東京大司教区広報

教皇フランシスコは、10月6日（日）の正午の祈りで、タルチシオ菊地功大司教（東京教区）を含む21人を新枢機卿として発表された。教皇は、12月8日に枢機卿会議を開催し、新枢機卿の任命式を行う旨を明らかにされた。

日本人としては、2018年に選ばれた前田万葉枢機卿（大阪大司教）に次いで、7人目の枢機卿となる。

発表の翌日7日（月）には東京教区のアンドレア・レンボ補佐司教が教区ウェブサイトでメッセージを公開。「菊地大司教の枢機卿任命は東京教区にとっても大きな喜びであり、誇りです。わたしたちの牧者である菊地枢機卿を、父である神様がこれまで以上にお守りくださるよう、皆様のお祈りをお願いいたします」と呼びかけている。

略歴　1958年11月1日岩手県宮古市生まれ。86年3月16日司祭叙階（神言修道会員）。86年～94年西アフリカ・ガーナで小教区司牧、99年～2004年神言修道会日本管区長。04年5月14日新潟教区司教に任命、9月20日司教叙階。17年10月25日東京大司教に任命、同年12月16日着座。

カリタスジャパン担当司教・責任司教、アジア司教協議会連盟（FABC）人間開発局委員、日本カトリックボランティア連絡協議会担当、札幌教区司教座空位教区管理者、HIV／AIDSデスク担当、司教協議会東日本大震災復興支援室担当、カリタスアジア総裁、教皇庁開発援助促進評議会（「Cor Unum」）委員、教皇庁福音宣教省委員など歴任。現在は、日本カトリック司教協議会会長、国際カリタス総裁、FABC事務局長など務めている。

サンタフェ大司教区訪問

核兵器廃絶を訴える

名誉大司教　髙見 三明

今年の8月に三度目の来崎をされたジョン・ウェスター大司教様（サンタフェ大司教区）の招きで、9月6日（金）～7日（土）に米国ニューメキシコ州アルバカーキのニューメキシコ大学で「核戦略―核軍縮と核抑止」をテーマに開催された討論会（フォーラム）に宮崎広和先生や朝長万左男先生と共に参加しました。

ロスアラモス国立研究所元所長や現所長など30人近い有識者が意見を交わしました。わたしは被爆者として「核兵器使用は二度と繰り返されてはならず、大量殺戮（さつりく）を目的とした核兵器はこの世に存在すべきではない」などと訴えました。しかし、大方の参加者は核抑止肯定論者でした。

2日目の午後の公開討論で、国立研究所創設と核実験以来80年間ニューメキシコ州の先住民が被曝し差別されてきた歴史について2人の女性の証言があり、強く胸を打たれました。

フォーラムに先立つ2日間、トゥリニティ核実験場の見学はかないませんでしたが、ロスアラモス国立研究所（サンタ・フェの北西60㎞、110平方キロメートル、科学者など所員1万人以上）敷地内のブラッドベリー科学博物館と、アルバカーキの国立核博物館を見学しました。原爆投下と核兵器開発を誇示していると感じました。

8日の主日には、サンタ・フェの司教座聖堂まで聖母行列があり、ミサではメキシカン調の聖歌がにぎやかに歌われ、拝領祈願後にはインディアンの信者の踊りがささげられました。その最中に外で銃の発砲があり、教会の中は逃げ惑う人々で一時騒然となりました。莫大な予算（2022年80億ドル）をかけた国家事業の核開発と多様な人種と銃社会のアメリカを実感しました。

今回の訪米にあたり、関係者には深く感謝しています。

写真　①ニューメキシコ大学でフォーラムに参加 ②広大な敷地のロスアラモス国立研究所で撮影 ③ロスアラモスへ続く州道に教皇フランシスコの言葉「核兵器の保有は倫理に反する」を掲げた看板がある ④サンタフェ大司教区での聖母行列

ほしかげ

今年も「死者の月」を迎えた。人はこの世の暦の中で「生きている」ようで、実は天の暦の中で「生かされている」ことを知る。己のその時はいつだろうか？　思わず、天を仰ぐ▲長崎には殉教地が多い。彼らはこの世の暦の中で亡くなるであろう前に、天に召されて逝った。〝パライソ！　イエス！　マリア！〟多くの殉教者たちの最期の言葉。いや、神によって生かされている者たちの最期の讃美だったか。己はその時、この世の暦の最期、果たして何を口にするだろうか？　▲最近、マリア・ワルトルタ（1897～1961）というイタリアの詩人を知った。「亡きがらを前にして、人はしばしば涙をこぼします。…むしろ、生ける屍（しかばね）のために泣くべきです。この人たちこそ真の屍であり、墓と化した体に息絶えた霊魂を住まわせているのです。いつか訪れる肉体の死を思って悲しむよりも、己の中（うち）にある屍の為に泣くべきです。」（『イエズスと出会った人々（三）』）▲「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。…『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」（ルカ23・28、31）▲先月はロザリオの月。〝人々がこれ以上わたしたちの主に背くことがありませんように。主はすでに多くの背きを忍んでいらっしゃいます〟（ファティマの聖母）。（三S）

教皇訪日5周年にあたり
レンゾ神父（二十六聖人記念館館長）にインタビュー

〝教皇はメッセージを残してくださった。このことを振り返る機会は大切〟

2019年11月、教皇フランシスコが日本を訪問された。23日から26日にかけて、東京、長崎、広島を訪れた教皇は多くのメッセージを残された。24日長崎では爆心地公園と西坂公園を巡り、県営野球場でミサを司式。その日は朝から雷雨に見舞われたが、次第に日が差し、ミサの時には晴天となった。同じ青空の下、私たちはパパ様とともに祈りをささげた。あの日から5年。教皇から受け取ったメッセージを、私たちは今も生きているだろうか。このほど訪日5周年にあたり、当時イエズス会日本管区長の任にあり、通訳として教皇に全日程帯同したデ・ルカ・レンゾ神父（現日本二十六聖人記念館館長）に、教皇に関して、またレンゾ神父ご自身が再び派遣された長崎で感じたこと、現代の教会や聖年について話を伺った。教皇の思いを感じ、さらなる祈りと行動へとつながる機会となるよう願う。（広報）

デ・ルカ・レンゾ師
アルゼンチン出身。1981年イエズス会入会。85年来日、96年司祭叙階。97年日本二十六聖人記念館副館長、2004年から館長。17年イエズス会日本管区長就任により館長を退任。23年管区長の任期満了に伴い再び長崎へ。24年1月館長に再任。

■神父様は昨年6月、6年ぶりに再び長崎に赴任されました。長崎の教会や西坂に関して変わったと感じることはありますか

そうですね、6、7年前と比べたら教会そのものが高齢化しているでしょう。教会から人が減っているという感じがします。以前うちの（聖フィリッポ）教会に毎日ミサに来ていた人もほとんどいなくなりました。ただ、西坂への巡礼者、観光する人の数は、全国各地、国外からも増えていますね。

©カトリック中央協議会

■5年前に教皇フランシスコが来日された時、訪問先での教皇の様子は？　過密スケジュールで公の時間以外に人と接する時間はほとんどなかったと思いますが

教皇はかなり忙しく、特に2日目は朝6時過ぎに東京を出て、長崎、広島に行き、夜遅く10時半ぐらいに東京に戻っています。翌3日目は朝5時頃から人があいさつに来ていました。私は通訳をしていたから知っているんですよね。帰る日も上智大学でのミサの前には130人ぐらいに会っています。一人一人にあいさつをして…すごく人のために時間を使っていました。休み時間が全く取れず、そばから見ていて大丈夫かなと思うほどでした。

■通訳する上で気をつけたことは

教皇は自分が伝えたいことがちゃんと伝わるか、日本人に通用する表現かどうか、メッセージを翻訳する際には特にそこを悩んだと思います。日本滞在時は準備されていない話ももちろん出るので、その場で通訳します。通訳は光栄なことではありますが、常に緊張感がありました。教皇が話す言葉はほとんどがスペイン語で、相手に伝わるように通訳しなければなりません。人々は教皇の言葉として受け止めますから、その意味では責任が大きかったです。

▲2019年11月24日爆心地公園で、『焼き場に立つ少年』を撮影したジョー・オダネル氏の息子タイグ・オダネル氏（写真左）と言葉を交わす教皇フランシスコ。教皇の隣・手前は訪日中の通訳を務めたレンゾ師。

■フランシスコとヨハネ・パウロ2世、2人の教皇が西坂に来てくださいました。昔も今も、この場所が発しているメッセージは何だと思いますか

それはまさに教皇フランシスコのスピーチの中にあります。殉教とは悲劇ではなく光であり、それを通してキリストへの信仰や復活への希望が示される。この場所が復活を告げる場所だということです。2019年当時は世界情勢が今よりまだ良かったかもしれませんが、世界にいろいろな矛盾や戦いがあっても信仰の光があるのだという、そのメッセージですよね。今だったらなおさらそれを強調したいでしょう。ここ西坂でのメッセージは、一番カトリックの色が濃かったと思います。他は、信者でない人も皆が分かるような言葉遣いでした。

教皇のメッセージは、日本のいろいろなメディアに例外と言ってもいいぐらい注目され、取り上げられました。残念に思うのは、その1カ月ぐらい後からすぐコロナ禍に入ったこと。教皇のメッセージがメディアにあがらなくなったんですね。メディアだけでなく、私たちの頭にもそうかもしれません。本来は年明け2月ぐらいに答礼のため司教団がグループでバチカンを訪れ、その時を振り返るという計画が考えられていたのですが、コロナの影響でロックダウンとなり実行できないままとなりました。ここ西坂には（2人の教皇が訪れた場所として）記念碑がつくられました。やはりそういうものはあった方がいいですね。

■キリシタン史の専門家でもあられる神父様にお尋ねします。かつて長崎の教会は司祭がいない中で潜伏し続けました。迫害の前に、司祭が信徒をよく養成していたからだろうと思います。キリシタン時代の教会を振り返ると、現代の教会はどのようにあるといえるでしょうか

教皇も司教団との会合（2019年11月23日）の中で話していますが、キリシタン時代の特徴的なことは、神父が足りなかったこともあって、信徒が自分たちを中心に看坊、同宿など、洗礼や葬儀を行っていたということでしょう。ですから、神父がいなくなっても信徒たちは自分たちでやっていくことができた。のちに神父が来て、日本、特に長崎に召し出しが増えて、どちらかというと神父中心、聖職者中心になってしまいました。つまり、召し出しが多くなって信徒が教会の仕事をしなくてもよくなり、手伝いということになったのです。

だけど今は、神父もシスターも高齢化しています。イエズス会にはミッションスクールが4校ありますが、今に至ってまだ「できれば神父を送ってほしい」と話しがあります。もちろん神父がいれば送りたいけれど、いない。「今は信徒がする」という考えへの切り替えができていないんですね。私たち聖職者にしても、信徒に任せるという姿勢が足りないのです。

■召命の実りを祈る一方、思考の転換も必要ということですか

そうです。今、教皇フランシスコが呼びかけているシノドス、シノダリティ、ともに歩むということは、まさにこのことですね。神父だけ司教だけでなく、信徒もともに教会をつくっていくということなのでしょう。シノドスで信徒が意見を出すのは必要だということ。これは世界の教会全体の問題です。以前のイメージや考え方を変えるのは難しいかもしれませんが、信徒ができる範囲のことはする。昔もそうだったんです。キリシタン時代には、一人一人が神様から与えられた、あるいは教会の共同体で与えられたミッションを持っているんだという意識がありました。一般的に言えば、子どもは子どもなりの役割、大人は大人なりの役割がある、という感じです。

■体力的に以前のように教会活動ができなくなり、年配の人が寂しそうにしている姿を見ることがあります。しかし、その方々の祈る姿、存在は私たちに影響を与えていると感じますが

役割というのは仕事だけじゃなく、祈るということも大きな役割でしょう。活動ができないからこの人には頼まないとかになると、つまり効率的なことにかたよると疎外される人が出てきてしまいます。そうではなく、例えば年配の人たちが子ども時代の話を子どもたちに聞かせるとか、子どもたちの聖劇で親やおじいさん、おばあさんが関わって参加するとか…芝居をするわけではないけれど、服を作るなどという形の参加。それがシノダリティですね。教皇フランシスコが意図するところが定着すれば、教会も変わってくるでしょう。

■気候変動や戦争・紛争など、世界は多くの課題・問題を抱えています。暗いニュースが多い中、宣教、福音を伝えることは希望となり得るでしょうか

私たちは思いの外メディアに依存しています。例えば2000年、3000年前から存在する聖書は、神の言葉を読むことができるという画期的なメディアです。ただ、現代のメディアがそういう暗い部分を強調してそちらのニュースを配信している。実際よく売れそうなニュースでもあります。ですから、私たちはメディアが取り上げることが世界の全部だととらえがちです。それらは聖書のような永遠のものと照らし合わせると、結局この地球では、侵略、戦争、暴力、革命などがずっとあったのでしょう。今もあるし、将来もあり得る。私たちはそれらが起こらないように努力しないといけませんが、その意味では今を生きている私たちの関心は50年前後のことに過ぎません。パンデミックにしても最初は大混乱となり、過ぎてしまえば、長い歴史の中の2、3年間に世界がおびえていたという事実でした。

だから私たちは、キリシタンとしては、良いニュースを伝えていく。家族に良いことがあったとすればそれを知らせるとか。教会の出来事や祝い事、あるいは教皇が5年前に来日したこともそうでしょう。確かに良いことがあったんだ、と。わざわざ教皇が来て、日本のいろんな場所を訪れてくださって、メッセージを残してくださった。このことを振り返る機会は大切だと思います。皆が良い便りを読んで、希望を持つ。メディアは大事な役割です。

■来年2025年は「希望の巡礼者」をテーマとする聖年であり、日本、広島と長崎にとっては被爆80年にもあたります。世界平和を願い聖なる年を過ごす上でどんなことを意識して過ごすとよいか、よかったらお考えをお聞かせください

やはり名前の通り、今年の終わりから始まる聖年を、希望を見いだす、希望を人々にもたらすときとするためにどうすればいいか、ですね。今まさに世界の中では希望が必要です。絶望的な状況、例えばロシアやウクライナを見ていても簡単に終わりそうにありません。私たちがキリストのメッセージとして希望をもたらすものとなれたら…。イエスが生きた時代もローマに支配され、ちっとも変わりそうにないような絶望的な時代でした。逆を言うと、人々は希望をもたらすイエスにすがりつくようなところがあったかもしれません。

■最後に、日本二十六聖人記念館館長として西坂に関して皆さんに希望することは

長崎の人で記念館に入ったことがないという人、結構多いんです。26聖人のミサには何回も参加したけれど記念館に入ったことはなかったという人はいましたし、うちの教会に関わっている人でさえ時々そういうふうに言います。遺骨（聖遺物）にしても、何百年も前の貴重なものがここで見られることを意外に皆意識していないかもしれません。いつでも行けると思ってついそのまま、ということかもしれませんね。

来年の聖年は、教会や巡礼堂など、特別な恵みが与えられる場所が指定されるでしょう。ここ西坂は聖年に関わらずもともと巡礼所ですから、全免償をいただくために何をすればいいとか（聖フィリッポ）教会の入り口に書いてあって、外国からの巡礼者、訪問者の人はよく読んでいるようです。

ですから、そういうことも含め、今回は指定される教会をまず把握し、1年の間にはその教会に行って祈るとか、人々を連れて行くとか、いろいろなことができるんじゃないかなと思います。信者として関心を持ち、自分がどうしても祈りたいこと、神様からいただきたい恵みとか何か考えながら、そういう場所を訪ねてほしいと思います。

聖フランシスコの聖痕８００周年記念 ミサと祈りの集い

9月17日（火）15時から「聖フランシスコの聖痕800周年記念ミサと祈りの集い」が長崎市西坂にある聖フィリッポ教会（西坂教会）にて行われました。

司式は兄弟桑田拓治管区長で、管区長はミサの説教で、聖フランシスコが受けた聖痕の恵みから、私たちの信仰と修道生活、管区の未来について希望を見出すよう語り掛けました。

今回は、管区長の呼びかけによって全国の修道院から西坂で23人（最終的に25人）の兄弟が参加しました。ミサをささげた後には日本26聖人の記念碑の前に移動し、26聖人の連願を唱え、日本管区の上に取り次ぎを願いました。日本26聖人は私たちフランシスコ会日本聖殉教者管区の保護者でもあります。

西坂でのミサと祈りの後、本原修道院に移動し、ともに食卓を囲んで、久しぶりに兄弟が集まる喜びを分かち合いました。

※「フランシスコ会日本聖殉教者管区」フェイスブックから転載の許可をいただき掲載しました。

西木場教会献堂75周年

約２００人が喜び分かち合う

9月15日（日）午前10時半、西木場教会献堂75周年記念ミサが行われた。西木場教会は、１９４９年7月19日、山口愛次郎司教によって祝別され、フランシスコ・ザビエルにささげられている。中村倫明大司教の司式のもと、出身司祭の聖パウロ修道会の山内堅治神父、出身修道者、小教区の信徒も含め約２００人が喜びを分かち合った。

大司教は、西木場教会に到着早々、集まった人々の歓迎にいつくしみ深いまなざしと笑顔をもって応え、言葉をかけられた。

ミサが始まる前に、新しいオルガンの祝福が行われ、入祭の聖歌が荘厳に聖堂内に響き渡った。中村大司教は説教の中で、教会建設時に18才で事故の犠牲となった女性信徒とその父親の気持ちに言及しながら、最も大切なキリストへの愛のために、あらゆるものを犠牲にし、ささげてきた歴代の信徒の心を忘れず、各々が自覚して、与えられたキリストへの信仰を力強くともに歩もうと説いた。

ミサ後、信徒会館で大司教を囲んで祝賀会が開かれ、参列者一同大きな喜びを分かち合った。（西木場教会）

〝希望を持って進もう〟

福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭

福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭が9月15日（日）、田平教会を会場に午後2時から開催された。今年こそは、焼罪史跡公園で殉教祭を実施しようと準備に取り組んできたが、連日の猛暑により熱中症予防のため会場を田平教会に移し行うこととなった。平戸地区からの信徒、修道者ら約１００人と地区司祭団が集い、中村倫明大司教の司式のもと殉教記念ミサがささげられた。

大司教は説教の中で、「あしあと」という聖歌を紹介し、自ら歌い、その中で歌詞の趣旨に触れ、どんな時も神が、キリストがともにいて、一人ひとりとともに歩いてくださっていると説き、希望を持って進んでいこうと励ましの言葉を贈った。また、召命のために祈り、志願者、神学生の召し出しに協力してほしいとの希望も語った。

殉教祭後、実行委員会のメンバー約40人は平戸口教会の信徒会館に移動し、大司教を囲み、反省会と慰労会を行った。

聖母の騎士修道女会 第１回日本管区会議

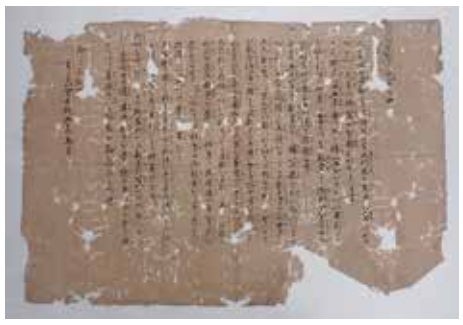
けがれなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会は、9月14日（土）から16日（月）まで第1回日本管区会議を本部修道院（諫早市小長井町）で開催した。管区長および管区顧問が次の通り選出された。

管区長　岳野 理花
副管区長　西村 和子
顧　問　齋木 初江
同　　山川 裕美

同修道会は１９５０年12月15日、聖マキシミリアノ・マリア・コルベの遺志を継いでコンベンツアル聖フランシスコ修道会のミエチスラオ・マリア・ミロハナ神父により創立。小長井町で始まった同修道会の活動は広がり、現在は長崎の他に佐賀と大分、国外ではポーランド、韓国、ベトナムに修道院がある。会のモットーは「けがれなき聖母マリアを通してイエスのみ心へ」。

プティジャン司教の聖年に関する書簡

大浦天主堂キリシタン博物館 学芸員　島 由季



来年２０２５聖年を迎えることにあわせ、大浦天主堂キリシタン博物館の所蔵資料のうち、ベルナール・タデー・プティジャン司教が信徒に向けて出した聖年の書簡（下段の写真）をご紹介させていただきます。

本書簡は、１８７５年の聖年の際に出され、大赦を授かるにあたっての指示が示されています。

第一に、信徒は計15日の間、「天にまします（主の祈り）」「聖寵みちみち（アヴェ・マリアの祈り）」を一日5回申し上げなさいと記され、この祈りのうちには、いまだ潜伏状態にあるキリシタンたちが皆残らず聖なる信仰へと向かうよう願うことが含まれていました。

第二は、ゆるしの秘跡とご聖体の秘跡について、この特別の機会に、希望する者はご赦免を受けるよう勧められています。

また、司教自身の願いとして、教皇のご恩を大切に思い、各自の悪行を正すように求めています。

この書簡は来年の２０２５聖年と、信徒発見１６０周年にあわせ、博物館で公開予定です。

また、現在プティジャン司教帰天１４０周年記念展を開催中で、長崎大司教区の信徒の方は、各主任神父さまの証明により無料で入場できますので、多くの方にご来場いただければ幸いです。

プティジャン司教帰天１４０周年記念

大浦天主堂が伝えるもの―受け継いだ信仰と宣教師の思い

12月26日（木）まで開催中

大浦天主堂キリシタン博物館

入場料について、長崎教区の信者の方は教会のお知らせをご確認ください。

「カテキスタの集い」開催 皆で充実した時間を共有

9月23日（月）カトリックセンターで「カテキスタの集い」が開催された。交通事情により当日はやむなく一部キャンセルがあったが、司祭、修道者、信徒ら約１００人が集まった。年に一度、教区内の現役カテキスタが一堂に会するこの行事は、昨年までは「カテキスタ研修会」という名称だったが、今回から「集い」に変更された。

テーマに「シノドスとカテケージスーともに学び、ともに語り、ともに祈る」を掲げ、まず谷脇誠一郎師（カテキスタ養成担当）の講話が行われた。その中で教区シノドス推進のための取り組みや、バチカンで開催されるシノドス第16回通常総会の概要が紹介された。そして、カテケージス（要理教育）がシノドス（ともに歩む）の流れをくみ取っていくために、「みことばを掲げる」ことと「シノドスバイキング」（本紙２０２３年4月号参照）を進めていこうという話しがなされた。

午後にはこの二つについて、グループ別に分かち合いをし、お互いの好きな聖書のみことばや小教区で行われている取り組みやアイデアを紹介し合った。最後に感謝のミサがささげられ、皆で充実した時間を共有し、喜びのうちに集いを終えた。

教皇訪日時の全メッセージ

インターネットから閲覧・視聴できます

２０１９年11月に日本を訪問された教皇フランシスコは、私たちに多くのメッセージを残してくださいました。あらためて思い起こしましょう。

長崎では『核兵器に関するメッセージ』『殉教者への表敬』『ミサ説教』を話されています。

カトリック中央協議会発行の『すべてのいのちを守るため―教皇フランシスコ訪日講話集』（税別１１００円）や『教皇フランシスコ訪日公式記録集』（税別４５００円）などもあります。

カトリック中央協議会ウェブページ「諸文書」→

POPE IN JAPAN 2019 ライブ映像一覧のページ→

ペトロ岐部と187殉教者列福式記念墓地
カトリック長崎中央墓園
【墓地管理委員会 カトリック中町教会内】
TEL 095-823-2484　FAX 095-823-2486
詳細は【カトリック中町教会】で検索
（有）鉱栄商事（石材・墓碑・管理・墓じまい）
TEL 095-834-4910　FAX 095-834-4912
〒850-0066　長崎市大浜 650-111

ド・ロさま ちゃんぽん
Nagasaki Spaghetti 長崎スパゲッチー Since 1883
株式会社サンフリード
長崎市田中町584-1
TEL(095)813-8787
右記URLからご注文できます

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

2025年 家庭委員会カレンダー
「ともにあゆむ」発行

教会には典礼暦年と呼ばれる暦があり、その中で、キリストの降誕、受難、復活、昇天、聖霊降臨など1年を通してイエス・キリストの生涯と全神秘を記念し、その恵みにあずかります。この典礼暦年を意識しながら過ごすことは、信者にとって、とても大切なことです。

信仰生活をより豊かに過ごすための一つの方法として、このカレンダーを企画して8回目の発行となります。今回は、秘跡を中心にお告げのマリア修道会のシスターに絵を描いていただきました。若い家庭や子どもたちへの要理教育にもご利用いただきやすいと思います。

タイトルの「ともにあゆむ」とは、「典礼暦を意識しながらキリストとともに、記念日などを意識しながら家族とともに、亡くなった方々の命日を書いて祈りとともに、行事など意識しながら教会とともにあゆむ」このような思いを込めています。このカレンダーがいつも家庭の中にあって、皆様の信仰生活に役立つことを心より願っています。

販売方法は、従来通り各教会での取りまとめとさせていただきます。詳細は各小教区へのご案内をご確認ください。

（教区家庭委員会）

2024年度 第1回 司祭評議会

9月9日(月)10時から大司教館で行われ、以下の事項が審議、承認された。

①2025年通常聖年に準備すべき事柄

7月末から教区本部が取りまとめ、「2025年聖年と被爆80年」について各地区の司祭や信徒の評議員を中心にアンケートを実施した。その回答をもとに8月末に教区シノドスコアチーム会議で検討し、そこから提案された内容を審議した結果、教区として次の取り組みを承認した。

▼開年ミサを浦上教会で12月29日(日)14時から行う▼各地区で3つの巡礼指定教会を選ぶ。他に4つの教会または巡礼所を加えて25教会（巡礼地）を指定する▼指定教会には「バンナ」を配布する。他の教会は希望を取り実費で提供する。また、「のぼり」を作成し各教会に希望を取って無料で配布する▼巡礼スタンプ帳、年間行事日程のポスターを作る▼ローマ巡礼を企画する▼聖年中の活動を各委員会で計画し、さらに準備を進める。

②2025年8月の平和祈願祭（被爆・終戦80年）

▼8月9日(土)から10日(日)にかけて浦上教会などで永久聖体礼拝を行うかどうか今後検討する▼「核なき世界基金」としての献金を8月9日の浦上でのミサの中で奉納する。

③小教区再編

今年6月の大司教文書で各小教区宛てに「小教区再編」についてのアンケートを依頼し、全地区から結果が届いた。小教区の設立、廃止や著しい変更には司祭評議会の意見を聞く必要（教会法第515条2項）があるため、今後さらに具体的な再編を審議することで一致した。同時に、修道者や信徒とのより緊密な協力体制の必要性が確認された。

また報告事項として、▼「日向灘沖地震復興支援」のために一菜募金から200万円を大分教区に送金▼司祭の緊急時連絡先などの教区への提出依頼などがあった。

2024年度 第2回 教区顧問会

9月9日(月)13時から大司教館で行われ、以下の事項が審議、承認された。

①2025年通常聖年関連補正予算

②2024年度資産運用計画変更

③司祭給与支給制度の刷新作業への着手が承認された。

また、報告事項として、▼深堀教会の防災工事、諫早教会改修工事の実施▼伊王島愛児園隣接地防災工事と旧ロザリオ幼稚園の解体工事の予定などがあった。

お知らせ

〈一菜募金からの支援〉

火災により被災した浦上小教区信徒へ見舞いのため15万円（9月24日送金）。

ぶどう園

▼自死された方々のための追悼ミサ　11月30日(土)14時、西坂・聖フィリッポ教会。ゆりの会主催。教区人権委員会協力。

問合先・鳥巣シオリ TEL 090-9488-7931

感謝

―寄付―

長崎大司教区
●匿名様
●松尾雅子様
●井川ノシ様
●山内政夫様

―香典返し―

長崎大司教区
●レデンプトリスチン長崎修道院様

長崎カトリック神学院
●鍋内秀幸様
故テレジア鍋内まち子様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

ペトロ
瀧 憲志 神父
（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）

9月3日、諫早市の聖フランシスコ園で老衰のため逝去。93歳。1931年鹿児島県生まれ。61年終生誓願。65年司祭叙階。66年大笠利助任、その後、上智大学で司牧神学を学ぶ。67年から奄美大島の小教区で司牧。97年イタリア・アシジ。2005年奄美・古田町、09年長崎・本河内、17年から聖フランシスコ園で生活していた。

奄美大島で長年奉仕し、多くの信徒に慕われた。アシジでは巡礼者を親切に案内し、霊的な出会いと福音宣教に努めた。晩年はSNSを通して聖書の言葉や教皇のメッセージを発信し、会員たちを励ました。特に若い会員や神学生に気を配り、積極的に声をかけるなどして元気づけた。厳しさもあったが穏やかで、親しみ深い人柄であった。

ヨハネ
竹内静雄さん
（竹内英次師の父）

9月7日、間質性肺炎に伴う呼吸不全のため逝去。91歳。

新上五島町出身。若い頃は船乗りとして漁船に乗り、漁に出ていた。長崎や佐世保の魚市場で仕事をしていたが、その後はダム造り、警備などの仕事をした。2男3女の中で末息子の英次を教区司祭として送り出した。笑顔を絶やすことなく、誰とでも分け隔てなく仲良くしていた。

高齢のため身体が思うように動かなくなり、食事を取ることが難しくなったために老人ホームに入所した。妻満子は2年前に逝去していた。どの介護士からも親しみを込めて「おっとう」と呼ばれ、過ごしていた。

葬儀ミサは9月10日、三浦町教会で行われた。

マリア
楠本アキノ修道女
（お告げのマリア修道会）

9月8日逝去。88歳。1935年新上五島町生まれ。58年初誓願、77年終生誓願。

鯛之浦の福祉施設で奉仕した後、調理師の腕を生かしてカトリックセンター、大司教館で36年間、歴代の大司教、司祭たちのお世話をした。共同体においては院長の重責も忠実に果たした。元来きれい好きで、調理の後は厨房を磨き上げ、来訪者には気前よくコーヒーを振る舞い、気遣いのある思いやりの深いシスターだった。2021年から養護老人ホーム聖マルコ園で過ごしていた。9月初めに容体が急変し、家族や後輩のシスターたちと言葉を交わし、霊名の祝日に帰天した。

葬儀ミサ・告別式は9月9日、お告げのマリア修道会大聖堂で行われた。

マリア
道脇ミサ子修道女
（お告げのマリア修道会）

9月12日逝去。96歳。1928年五島市生まれ。59年初誓願、68年終生誓願。

被爆した2年後、19歳で水ノ浦修道院に入会。45歳から保育士、園長として幼児保育に関わり、水ノ浦のほか長崎、佐世保地区で園長と院長を務めた。約10年前からがんや再生不良性貧血などのために入退院を繰り返し、近年は老人施設「みみらくの里」に入所していた。シスターは園児や保護者に慕われ、責任感が強く、几帳面な方だった。毎年8月9日の日記に被爆の体験を書き続け、新聞に取り上げられたこともあった。

葬儀ミサ・告別式は9月14日、水ノ浦教会で行われた。

マリー・エレナ
矢島てつ子修道女
（レデンプトリスチン修道会）

9月18日逝去。93歳。1930年岐阜県生まれ。62年初誓願、69年終生誓願。

外務修道女として教会で奉仕し、手芸講師の免許を持ち、クラスで教えていた。クリスマスには病院訪問での患者さんのために心を込めて贈り物を作っていた。人々との出会いを通して、主のいつくしみの心を伝えるように努め、祈っていた。

高齢になってからは介護施設に入居していた。衰弱し病院に搬送されたが、延命処置を辞退し、姉妹の見守る中、静かに御父のみもとに召された。

コンラード
濱田盛雄 神父
（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）

9月25日、諫早市の聖フランシスコ園で肺炎のため逝去。92歳。

1932年平戸市生まれ。宝亀教会出身。59年司祭叙階。同年、聖母の騎士学園。60年本河内主任、69年本部修道院・管区評議員（会計役）、73年聖母の騎士社代表。聖母の騎士修道院長時代の81年2月には来崎した教皇ヨハネ・パウロ2世を迎えた。同年12月副管区長、管区事務局長。85年から東京・東村山修道院長、長崎・本河内主任、東長崎主任、湯江助任などを歴任した。

長年にわたって修道院の院長や幼稚園園長を務め、規律や修道生活に厳しく几帳面なところがあったが、誰にでも分け隔てなくやさしく、細やかな配慮をする方であった。9月6日に心不全のため入院した後、自らの希望通り24日に聖フランシスコ園へ戻ったが、25日午後1時25分に帰天。食事や魚釣りなどを楽しみ、釣った魚を多くの兄弟たちと食し、兄弟愛を分かち合った。

CALIS Catholic Life Service
カリス通信　11月号
学校に関わるリスクと保険のご紹介

昨今の学校に関わるリスクは複雑化し、いじめ、試験の採点ミス、職員のパワハラやアカハラ、児童・生徒へのセクハラおよびサイバー攻撃とリスクは多岐にわたります。今回は、学校に関わるリスクに対応するための保険をご紹介します。

＜学校教育活動賠償責任保険＞
学校教育活動の遂行または侵害行為（＊）に起因して、学校（被保険者）に対して、損害賠償請求がなされ、法律上の損害賠償責任を負担することによって被る損害に対し、保険金をお支払いする保険です。
（＊）侵害行為とは、パワハラ、セクハラといったハラスメントやいじめ等の行為をいいます。

＜サイバーリスク保険＞
サイバーリスク保険は、次の３つの補償により、事業活動を取り巻くサイバーリスクを包括的に補償します。
①損害賠償責任に関する補償　②サイバーセキュリティ事故対応費用に関する補償　③コンピュータシステム中断に関する補償（オプション）

＜学校教育活動に関する事故事例＞
• 学校が生徒間のいじめを把握できず、いじめられた生徒が転校を余儀なくされ、被害生徒から精神的苦痛を受けたとして損害賠償請求をされた。
• 卒業試験の採点ミスで、本来合格とすべき学生に対し、不合格の通知を行っていたことが発覚した。留年を余儀なくされたとして、保護者から損害賠償請求をされた。
• 部活動の学生が、顧問の先生からセクハラにより精神的苦痛を受けたとして、学生とその保護者から損害賠償請求をされた。

カリスでは、学校に関わるリスクと保険についてご案内をしています。ご不明点や詳細につきましては、カリスまでお問い合わせください。
※本ご案内は「学校教育活動賠償責任保険」と「サイバーリスク保険」についてご紹介したものです。ご契約にあたっては「重要事項説明書」をご一読ください。

私たちが、お守りします。大澤阿紀子　大西 晃　毛利玲子　服部秀昭　川口 薫神父（顧問）

カトリック共済システム 有限会社カリス　〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館　連絡先 0120-77-0033
カトリック共済システム 検索　24TC-003374（2024年9月作成）
引受保険会社：東京海上日動火災保険株式会社
リスク・補償に関してお気軽にお問い合わせください

石碑
文字彫刻
墓地工事
リフォーム
墓地分譲
長崎石彫（ながさきせきちょう）
ヨゼフ　岩永　貴弘
☎(095)862-2469
長崎市花園町 23-17 立岩公園前

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル　西田 剛
本社　〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268